した。

④ 高村豊周の起用

大正十五年四月二十三日、高村豊周（とよちか）が助教授に任命され、鋳造科鋳造実習授業担任を命ぜられた。豊周は高村光雲の三男にして光太郎の実弟。明治二十三年、東京に生まれ、同四十一年に津田信夫に師事、同四十二年四月本校に入学、大正四年に鋳造科を卒業した。在学中に短歌の会、鴨跖草（つきくさ）会を結成、それが黒耀社に発展した。また在学中に青壺会を作り、鋳金作品を発表、卒業後、柱人社、装飾美術家協会等の工芸研究団体を組織して作品を発表した。第九回農商務省工芸展覧会（大正十年）に出品し二等賞を受賞するが、農展のありようを批判する評論を発表し、以後出品しない。同十四年、聖徳太子奉讃美術展覧会委員、国民美術協会常議員、日本美術協会委員を嘱託された。同年、津田信夫がフランスから帰国したとき、豊周は杉田禾堂、北原千鹿、佐々木象堂、山本安曇らとともに津田のもとに集まって金工の研究会を起こし、そのメンバーが中心になって翌十五年に无型を結成した。また豊周は後述のように津田のもとで日本工芸美術会の創立に尽力しており、常に工芸近代化運動の中心人物であったと言える。

新設された帝展第四部で豊周は第八回（昭和二年）から連続三回特選、第十一回（同五年）から推薦、第十五回（同九年）に審査員となった。同二年から无型展を主催、同十年に実在工芸美術会を創立した。同八年には本校教授となり、同十九年まで本校に勤め、同二十五年に芸術院会員、同三十九年に重要無形文化財保持者（鋳金）となる。光太郎の彫刻作品の鋳造は豊周が一切引き受けた。昭和二年には、小諸懐古園の「藤村詩碑」の蠟型原型を本校で製作している。

豊周は歌人でもあり、文筆に秀でていた。本校入学前、新詩社、与謝野鉄幹に弟子入りし、生涯、歌を詠み、昭和三十九年には新年歌会始の召人となり、四冊の歌集がある。また、本校在学中から感想、劇評などを発表、西欧美術思潮の変遷と微妙に関わりながら日本の工芸の在りうべき道を求めた工芸論を展開、真の装飾美術、工芸術から実在主義へと進む新興工芸運動の渦中から痛切な発言をした。著述集『高村豊周文集』全五巻（高村美佐編、高村豊周文集刊行会、平成四～六年、文治堂書店）がある。

大正十一年五月創刊の雑誌『工芸通信』は、発行人が現代の図案工芸社の編集者渡辺素舟、編集所は豊周の自宅（東京市本郷区駒込林町、現在東京都文京区千駄木）に置かれ、渡辺と豊周と田辺孝次が編集した。これより先き、大正八年、豊周らは装飾美術家協会を結成し第一回製作品発表会を開催したが、同じ頃、工芸美術会が本校関係者によって組織され、帝展工芸部設置運動を始めた。それに関連して豊周はウィリアム・モリスの工芸運動は日常生活の用具に美を投入してゆくことから

『工芸通信』

『工芸時代』表紙

起こったととらえ、一般社会の美の標準をだんだん上げてゆく運動が必要として『工芸通信』を創刊したのであった。同誌はA4判変型八頁の月刊誌で第二巻第四号まで十二冊発行されており、本校関係者では、豊周、田辺をはじめ、高村光太郎、今和次郎、畑正吉、川路柳虹、久米桂一郎、沼田一雅、広川松五郎、神津港人、岡田三郎助、水谷鉄也、神矢教親、和田英作、大村西崖、香取秀真、渡辺香涯、津田信夫、杉田禾堂、正木直彦、稲場勝邦、辻村松華、島田佳矣、海野清、原三郎、伊藤喬らが文を寄せている。

大正十五年十二月、アトリエ社社長北原義雄の義兄に本校卒業生の山本鼎がいたことから、同社から『工芸時代』が創刊された。山本は大正八年十月、日本農民美術研究所を信州上田に設立したが、農民美術や自由教育の母体となる工芸に一番力を注ぐべきという考えから、北原に工芸専門雑誌の発行を要望、山本と北原は豊周と広川松五郎に協力を要請。豊周らはこれを快諾した。それは、无型が旗揚げし、日本工芸美術会が展覧会を開く矢先で、「工芸家自身が乗りださなければ駄目である。その晩は大いに意気投合して、何でも彼でも片端からやってのける勢いで、皆で夜を徹して語りあった」と豊周は記している(『自画像』昭和四十三年、中央公論美術出版)。津田信夫も『工芸時代』発刊に賛成、激励した。同誌は翌昭和二年十月までに十一冊が発行され、『アトリエ』の工芸美術欄に引き継がれた。「工芸時評」「人物月旦」等、本校関係者が多数執筆し、帝展第四部新設に向けて新しい工芸の主張と模索を記録する貴重な出版物となった。時を同じくして豊周は『无型』パンフレットを創刊、昭和二年から七年まで二十八号発行。また、本校校友会機関誌『東京美術』十三号から十八号の編集兼発行人となった。

自筆履歴書に、「大正七年以来製作セシ主ナル銅像」として、「故園田孝吉氏銅像」(大正七年)、「岐阜県岩村町　浅見翁銅像」(同七年)、「秋田県仙北郡千屋　坂本東獄翁銅像」(同十一年)、「富山市　阿弥陀仏立像」(同十三年)、「宮城県志田郡荒雄村　青沼彦吉翁銅像」(同十四年)、「松方巌氏胸像」(同十五年)とある。昭和五年九月二十日に本校工芸部各科に課する塑造実習授業担任兼務、同六年六月三日、図案科工芸製作法(鋳金)担任兼務、同八年四月十一日、工芸科予科理事兼務、同九年一月十五日、工芸科に課する絵画、塑造各教室兼勤となり、鋳金部の実習だけではなく、工芸科全体の絵画と塑造の授業を担当し、和田三造主任に代わって予科学生の指導にあたった。そのため、工芸科の学生に対する豊周の影響力は大きかった様子である。のちに鋳金部でも主任のよ

うな存在となった。

自著『自画像』によると、助教授就任のとき工芸の教官に「自分がやりたいと思うことを遠慮なく実行してもらいたい。この学校には、科の教育方針というようなものはないから、何でも好きなように、生徒がよくなることをどしどしやってもらいたい」と言われた。当時は先生が生徒の作品に直接手を加えて直すことが教育だと思われていたが、豊周はそれをせず、生徒が花瓶の図案を描くと構成の理屈を説明し、基本になる考え方を教えた。生徒には「この学校は、技術者でなく作家になることを教える所だ。その見当を間違えては駄目だ。自ら勉強の仕方も違う。美術作家はもっと欲望をもって貪欲に何でも知ろうとしなければいけない。世間には、学校で教えてくれないものが一杯ある。生きた社会を生きた目で見ることを覚えなくてはいけない」と話した。「見る」と「読む」と「聞く」が大事で、それ以外に文学が必要だとした。この頃、香取秀真が生徒に「ただ工場へ行って仕事をして、鋳金が出来ただけでは駄目だ。自分で詠まないまでも、万葉集から古今、新古今ぐらいずっと読むだけの興味と理解がないような奴には仕事がうまくいかない」と詩情、詩精神の必要性を説いたが、豊周はこれに共感し、広く「文学」という言葉を使った。豊周は「文学、音楽、劇、活動写真などは遊びのようだが、自然に養われていく情操が自分の制作の根本になる。活動写真は生活に直接関係のある工芸を作るのに非常に参考になる」と話し、こんなことを言う先生は少なかったから、生徒は喜んだ。金工科の生徒は卒業制作の図案でも、みな豊周に見て貰ったという。また、校友会では映画部長を務めた。

⑤ 田中豊蔵の起用

大正十五年四月、田中豊蔵が講師（中央亜細亜美術史授業担当）を嘱託された。田中は明治十四年京都市に生まれ、同四十一年東京帝国大学文科大学文学科（支那文学専攻）を卒業。同四十五年六月以降大正十年三月まで『国華』の編集に従事し、また、大正九年二月以降は文部省の古社寺保存計画調査嘱託を、同十年四月以降は慶応義塾大学文学部講師（東洋美術史講義担当）をつとめていた。

⑥ 正木直彦校長の勲章受領

大正十五年十一月、正木直彦はベルギー国王より勲章 Grand Officier de l'Ordre de Leopold Ⅱ を贈された。叙勲の理由は次の文書のとおりである。

叙勲セラレタル理由書

今般小官儀白耳義國ヨリ「グラン、オフキシエー、ド、ロルドル、ド、レオポール二世」勲章ヲ下賜セラレ候處右ハ曩ニ同國ルーヴァン大學並ニ同大學図書館復興ノ計畫實行ニ際シ小官モ其委員ノ一人タルコトヲ嘱託セラレ同図書館ノ為ニ図書ノ蒐集ヲ謀リ聊カ微力ヲ致シ斡旋スル所有之候ヲ以テ恐クハ其勞ヲ認メラレ叙勲相成リタルモノト思料致候也

大正十五年十一月十二日

東京美術学校長　従三位勲二等　正木直彦

（「大正十五年職員関係書類庶務掛」）